

〈修士論文要旨〉

中世土器研究とその方法

——大和における一考察——

奥井智子*

大和出土の煮沸具については、さまざまな視点から検討がなされている。しかし、資料増加に伴う再検討がなおざりになっていたことは事実であり、反省すべき点であると考え。このため、大和における煮沸具の検討をし、形式分類、編年を行い、その生産体制の復元を試みる。また、大和の中世土器研究は、器種ごとの研究が中心であったため、中世土器様式を復元にまで迫った論考は希少である。しかし、土器様式の把握は、大和国内において地域差が認められるのかどうかという問題だけではなく、大和における土器生産体制ならびに流通の問題を考える上で重要である。よって、大和国内における中世土器の様相を概観し、検討を行うこととする。さらに、先の二つの検討課題の成果を受け、大和における中世土器生産体制を復元するとともに、中世的な土器生産体制とは何かという点についても言及していくこととしたい。

まず、大和出土の煮沸具の変遷についてである。土師器羽釜と瓦質羽釜は制作・焼成の相違から個別に検討を行った。形式の消長により段階を設定し、器形の変化から型式を認定した。そして、土師器羽釜は5形式19型式、五段階九期、瓦質羽釜は3形式9型式、三段階四期に分類でき、土師器羽釜のA段階は出現・受容期、B段階は分化期、C段階は発展期、D段階は転換期、E段階は集約期と位置づけられる。また瓦質羽釜のI段階は出現・受容期、II段階は転換期、III段階は集約期と位置づけた。この検討から、土師器羽釜は、さまざまな形式が出現・消滅を繰り返すものの、胎土や器厚などのおおまかな変遷は、異形式であろうとも、ほぼ同じ傾向を示すことを指摘した。また、盆地内に広く分布しており、複数形式が併存しているC・D段階においても、形式ごとで分布の偏りは認められず、併存して出土する例が多く認められることを明らかにした。このように、形式間では同じ変化をたどる傾向がみられること、分布域に偏りが見られないことの二点から、I～V形式は同一系統のもと、つまり、同一生産管理体制（器形・法量・胎土などについての一定の規範が存在）のもと生産されていると考える。

また、瓦質羽釜は、14世紀後半ごろから盆地内部を主に分布する傾向がみられるA・B形式と盆地北部を主に分布する傾向がみられる3形式があり、A・B形式の2形式は河内からの搬入品、C形式は土師器羽釜とは生産体制は異とするが、大和で生産されているものであると考えた。

以上の検討から、土師器羽釜は5形式とも大和において同一生産体制のもとで生産されていること、瓦質羽釜のA・B形式は河内からの搬入品、瓦質羽釜C形式は大和で生産されているものの、土師器羽釜とは生産体制は異とし瓦質土器生産工人により生産されているものであると考えられる。つまり、大和で出土する羽釜は、土師質、瓦質という焼成方法を異にする二系統の工人

平成16年度 *文学研究科文化財史科学専攻

集団により生産されたものと、河内からの搬入品があるということとなる。

次に、地域の把握についてである。土器の受容状況の差異は、狭い大和の中で、「流通圏」の差を示し、「商業圏」の差、「生活様相」として捉えることができるのではないかと考えられる。このため、奈良県内で出土した良好な資料を基に、瓦器碗を基軸とした土器様相の把握を行い、それとともに「地域」の認定を行った。この結果、遺物の共伴関係や出土量の差異などから、様相の差異を見出すことができ、盆地内において、それぞれ一定の範囲を伴った分布域を見出すことができた。そして、それぞれの地域を、「北和」、「中和」、「南和」とし、地域として認定し、大和は三地域に区分できることを明らかにした。

最後に、大和における煮沸具の生産のあり方についてである。上記二つの検討から、同じ土師質の土器である土師器皿と土師器羽釜は、形式ごとの分布状況、分布範囲、製作工程などに多々、差異が確認でき、このため、土師器羽釜の生産体制は、土師器皿の生産体制とは同様のものではないと考えられる。土師器羽釜と瓦器碗は、どの地域からも広く出土すること、形式内の型式変化も地域を問わずに、ほぼ同様の様相を示していることなどから、比較的似た傾向を示しているといえる。このことから、土師器羽釜は、土師器皿生産よりむしろ、瓦器・瓦質土器の生産体制と同様であったと考えられる。

そして、土師器羽釜は、どの形式でも、胎土に砂粒が多く混じるものから胎土が精良になるものへ、器壁も厚いものから器壁の薄いものへと変化してゆくという、一連の変化の特徴が同様の傾向を示すことや、形式が異なっても、その分布域に偏りはみられないことから、各形式の生産組織（それぞれの工人の出自・所属や生産単位）は異なっても、生産体制は同一系統下（同一の生産管理体制のもとに置かれた）にあると考えた。

また、流通の点にも着目し、E段階のV形式が広範囲な分布を示すということを取り上げた。V形式が広範囲な分布を示すということから、社会的体制の転換という社会背景だけとは考えにくく、V形式の「商品」としての価値に着目し、そしてそれは、大和のV形式の土師器羽釜が、もともと一国内での消費を前提としたものではなく、瓦質土器のような一国の枠を超えて流通することを前提としたものであったとした。つまり、大和の羽釜に与えられた性質は、他地域の羽釜とは異なっており、この差異こそが、大和の羽釜の最大の特徴であったといえる。そして、その大和の羽釜の特質こそ、土師器羽釜が瓦質土器と並ぶ大和を代表する「商品」であったということであるとした。

今回の検討から、また、煮沸具である羽釜を中心として大和の中世土器様相を論じたこと、個々の様式にとらわれ、大和全体での地域性について問われたことがなかったが、その地域性を把握できたこと、大和の煮沸具の生産体制について、今まで考えられていたような煮沸具の生産体制とは異なる状況をうかがい知ることができ、各形式の生産組織は異なっても、生産体制は同一系統下にあるという新しい見解の提示ができたこと、この3点に、この論考の意義を見出すことができる。